

やさぐれ魚の
ぼうけん2

～やさぐれ魚とたい焼き～

作：橘 夢人

バレンタインの前日、
おかし屋さんのオーブンで生まれたクッキーのやさぐれ魚。
しかし彼はクッキーとして食べられることを嫌い、海への脱走を図ります。

テーブルからぽとりと落ちて首尾よく冷蔵庫の下にもぐりこみ、夜になるまで待つと、
忍び込んできたお腹をすかせたねこを助け、ねこの背に乗り店の外へでることに成功します。

しかし、ライバルに会って喧嘩を始めてしまったネコに投げ出され、公園の隅にぽとりと落ちてしまいます。

そこへ通りかかったのは迷子の子柴犬。
やさぐれ魚は子犬に家への道を教えてあげ、かわりにのせてもらうことにしました。
ところが、大通りで偶然飼い主に出会えた子犬はおおはしゃぎ。
やさぐれ魚を乗せていることを忘れてじゃれついたので、やさぐれ魚は飛ばされて、今度は排水溝の中にぽとりと落ちてしまいます。

あたりは暗くなり、だんだんアリが集まってきました。
アリに運ばれかけながらも「俺は海を見るんだ！」とやさぐれ魚が叫んだ時、ぬうっと現れた一つの影。
それは水族館から逃げ出して、野を越え山越え谷越えて、故郷の南極の海を目指すキングペンギンのリカルドでした。
危ない所を助けられたやさぐれ魚は深く感謝し、彼と行動をとものにします。

しかし、明るい月夜のこと。
水族館からの追っ手が迫り、リカルドは「いつか海でまた会おう」と言い残しやさぐれ魚と別れます。
取り残されたやさぐれ魚は電柱の下で一晩眠ることにしました。

翌日。
つつかれる感覚で起こされたやさぐれ魚が怒ると、巣から落ちたカラスの雛がうなだれていました。
お腹がすきすぎた雛のために、やさぐれ魚は尾びれの先をちょこっと食べさせてあげます。
まもなく帰ってきた鳥のお母さんはやさぐれ魚に感謝し、彼を川まで送り届けてくれることになりました。

川の上空にきてみれば、そこには手に手に網を持ち、リカルドを追い回す人間たちの姿。

やさぐれ魚に頼まれたカラスのおかあさん決死の降下攻撃に人間が取り乱している隙に、リカルド見事に網をかいくぐってざぶんと川に飛び込み、すばらしい速さで海へと泳ぎ去りました。

そしてその後ろを、ちょっと尻尾の欠けた小さな小さな魚のクッキーが、まだ見ぬ大海を目指して泳いでいきました。

はじめての川下り

やさぐれ魚は泳ぐのは初めてです。

けれど、なにしろバターたっぷりのツヤツヤなので、ふやけてしまう心配ありません。

生地を刺す水の冷たささえも心地よく感じながら、ちょっと欠けた小さな尾びれを力づよく動かして、ぐんぐん進んでいきました。

川にはおもしろいものがいっぱいあります。

缶コーヒーのねぐらから早起きのモクズカニが這い出してきた、やさぐれ魚に手を振りました。

やさぐれ魚も尾びれを左右に振ってそれに応えます。

沈んだバイクの上を泳げば、サドルに登ったテナガエビが腕をふりまわして体操しています。

やさぐれ魚もくるくると円を描いて、一緒に体を動かしました。

川底の砂からドジョウがでてきて、寝ぼけなまこで「やあおはよう」とあいさつしてきたので、

やさぐれ魚も「おはよう！」と声をかけました。

ほかにもフナにタニシにアメンボに、

初めて見る生き物たちとあいさつを交わしながら、朝日がきらきらと差し込む川の中を、やさぐれ魚はどんどん下っていきました。

太陽が真上に昇ったころ。

「おおい、そこの小さな魚君。助けてくれないか〜」

野太いのんびりした声に呼び止められて、やさぐれ魚はきょろきょろとあたりを見渡しました。

「ここだよ、ここ〜」

声のする方をよくよくみれば、岩場の影になにやら茶色く大きな固まりがいるようです。

やさぐれ魚は用心しながら、そろそろと泳いでゆきました。

近づくにつれてよく見えてきたその魚は、見ればみるほど奇妙な姿です。

やさぐれ魚の何10倍もあるずんぐりとした茶色い体は、どこかふわふわしていてやわらかそう。

しかし、立派なうろこ模様があり、ところどころにこげめがついています。

短く平ぺったい尻尾はカリリととがっている反面、

おなかは大きく重たそうで、卵でも抱えているかに見えました。

茶色い魚はや大きなグリグリした目を動かしてやさぐれ魚を見ると、

「ああ、ほんとによかった。たすかった」と心底安心したようにつぶやき、へにやりと相好をくずしました。

「どうしたんだい？だんなさん」

やさぐれ魚は茶色い魚の目の辺りに泳ぎより、よく通る声で聞きました。

「この針をなんとかそっと外してくれないか。お腹のアンコが重いもんだから、どうも自分ではうまくいかないんだよ。」

見ればたしかに、茶色い魚のふわふわのくちびるには、小さなかぎ針がひっかかっています。

これならちょっとかじってやればとれそうです。

「よし、分かった」

と、やさぐれ魚は言いました。

「ちょっといたいかもしれないが、がまんしろよ！」

と言うが早いか、やさぐれ魚は針がひっかかったふわふわしたくちびるにぱくりとかみつきました。

「あいたっ！」

とおもわず茶色い魚が悲鳴をあげ、水面のうえで何かがぶるんとふるえました。

あっと思うまもありません。

茶色い魚はなにかすごい力にひっぱられ、ちゅうをまいました。

ぱくりと、噛みついていたやさぐれ魚も、もちろんひとたまりもありません。

2匹は青空にきれいな弧を描き、だばん！ぽちゃり。という音をたてて黄色いバケツの中に落ちました。

「なんだ？たい焼き！？」

やさぐれ魚がバケツのそこで目を回していると、上からすっとなきょうな声が聞こえました。

と、同時に大きな手が延びてきて、やさぐれ魚に重なるように同じく目を回していた、茶色い魚を持ち上げたようです。

急にまぶしくなって、やさぐれ魚は思わず低くうなりました。

「たい焼きが釣れるなんてすごいぞ！」

相変わらず水面の上から甲高い声が降ってきます。

「ちょうどお腹がすいていたんだ。でもこれ、ちょっとふやけてるな。しばらくほしたらだいじょうぶかな？」

うっすら目を開けてみると、水面の向こうに、茶色い魚を手に興奮して独り言を叫ぶ人間が見えました。

ダウンジャケットいうやつのおかげでプっくりきぶくれ、頭にはニット帽。

その顔は興奮のためか赤くなっています。

人間はタオルを取り出してバケツの周りでしばらくごそごそしていましたが、やがて離れていきました。

「おおい、だんなさん。大丈夫かい？」

人間が離れたところを見計らって、やさぐれ魚はバケツの中に横たわったまま茶色い魚に声をかけてみると、

「大丈夫だ～。いきなりぱくりとくるからびっくりして動いちまったよ。あいててて」と、のんびりした声が聞えました。

黄色い壁に阻まれて外を見ることはできませんが、どうやら茶色い魚は無事だったようです。

「そいつは悪かった。一体何が起こったんだ？」

とまだぐるぐるする頭を抱えながら、やさぐれ魚は重ねて尋ねました。

「私たちは釣られてしまったのです」

と、思いがけない所から悲しげな声が聞えました。

やさぐれ魚が振り返ると、見事な銀の鱗をもった美しいこいが、思慮深げな目でやさぐれ魚を見つめていました。

どうやらこのバケツには先客がいたようです。

「人間に食べられてしまうのですよ。どうしてあなたたちはそんなにのんきなのですか」

と美しいこいは悲痛な声でいいいました。

「だってたい焼きだものなあ」

とバケツの外からのんびりとたい焼きが答えました。

「俺は海へ出るんだ。こんなところで食われる気はない」

と、やさぐれ魚はいいました。

そして軽く頭をふってめまいが去ったことを確認すると、尾びれを2,3度ふってパシャリと跳ね上がりました。

そのままバケツのふちをくわえて身をのりだし、外の様子をうかがいます。

バケツはごつごつした石が転がる狭い土手の中ほどに置かれていて、川岸までは1mほどの距離があります。

ここからポトリと落ちても、逃げ出すのはちょっと難しそうです。

すぐ隣には、白いタオルの上で寝そべるたい焼きの姿があり、

人間はといううと、こちらに背を向けて川岸に立ち、次なる獲物を狙うのに忙しいようでした。

「おおい、だんなさん。あんた、ジャンプは得意かい？」

やさぐれ魚が声を殺して呼びかけると、

「得意だとも。こう見えても鉄板からジャンプだけで逃げ出したんだからね」

と、たい焼きは同じく声を潜めながらも、白いタオルの上で胸を張りました。

そこでやさぐれ魚は今度は後ろを振り返り、

「そしてきれいなこいさん。あんたコントロールはいいほうかい？」

と尋ねれば、

「悪くはない方だと思いますよ」

不思議そうな顔をしながらも、美しいこいは答えました。

「では、俺に考えがある。あんたたちも手伝ってくれないか？」

とやさぐれ魚は言いました。

「この川原は凸凹しているし、あの人間はどんくさそうだから、まあなんとかなるだろう。」

「じゃあ、手はずどおりに頼む」

「OK」

「わかりました」

バケツの内外で交わされたひそひそ話を、釣りに夢中の人間が気づくはずがありません。

突如あがったバシャン！という音に人間が振り返ると、バケツを回り込んで、川へ向かってぴょんぴょん飛んで逃げようとするたい焼きの姿がありました。

「わわっ！」

人間はあわててバケツに走りよります。

「いまだ！」

「行きますよ！」

その顔に、美しいこいの尾びれにポーンと跳ね上げられたやさぐれ魚が体当たりをしかけます。

「うわっ！？」

狙い過たず、ペチリと鼻の頭にぶつかってきたこげ茶色で小さくびちゃっと濡れた物体におもわずよろめいた人間は、土手の凹凸に足をとられてすっころび、はずみでバケツをけたおしました。

ドッパン！と音をたててこぼれたバケツの水は、美しいこいをのせ、たい焼きのせ、やさぐれ魚をのせ、ざぶりと川に戻りました。

「私はもうあきらめていました。あなたたちのおかげでたすかりました。なんとお礼をいっていいか。」

川底にたどり着いたたい焼きとやさぐれ魚を前に、銀色の美しいこいは涙を拭きながら言いました。

こいはこの川の上流の生まれでした。

りゅうになるために川を下り、はるか西の大陸にある「こうが」という川を目指す旅の途中だということです。

「恥ずかしながらお腹がすきすぎて、エビを食べてしまったのです」

と美しいこいはその銀の鱗をきらめかせて、節目がちに言いました。

「そういうこともあるよな」

とたい焼きがうんうんとうなずきながらいいました。

「俺は毎日焼かれるのが嫌になってまって、屋台から逃げ出してきたんだけど。川についたはいいが、海もなかなか遠いもんだ。

ちょっと小腹がすいたところに、ちょうどいいあんばいにエビがいたものだから、ぱく

りとやっちまって」

たい焼きははーっと深いため息をつきました。

「はりがついていたとはなあ。くちびるにひっかかって、どうにもこうにもとれなくなっちまった。

そこに魚くんが通りかかったから、人間が気づかないうちになんとかとってもらおうと思ったんだけど、やっぱり動いてしまったなあ」

とのほほんとした口調で続けました。

「俺はおかし屋から逃げてきた。バレンタインのプレゼントになるなんて冗談じゃない。仮初めにも魚の姿に生まれた以上は、海を泳いでなんぼだろう」

とやさぐれ魚も自己紹介をします。

「でも、こいつはいい出会いだ！」

とたい焼きがいました。

「俺たちみんな海を目指すわけだ。一緒に行こうじゃないか！」

たい焼きの提案を、やさぐれ魚も美しいこいも断る理由はありません。

旅は仲間がいた方が何倍も楽しいのです。

ところどころに現れるエビを注意深く避け、川底に沈む釣り針や網の類を見下ろしながら、3匹はどんどん川を下っていきました。

「おや、何かが泳いできますよ」

たい焼きの話す、おじさんの隙をついて屋台から逃げ出した顛末に聞き入り、ゆらゆら泳いでいた2匹でしたが、一際敏感な美しいこいがひげをピクリとさせて、前方の変化を告げました。

「これからいいところなのになあ」とぶつぶつ言うたい焼きとやさぐれ魚も前方に目を向けると、なるほど。

確かになにか小さいな茶色いものたちが、ものすごい早さで向かって来ます。

「ああ魚さんたち！」

3匹の前に辿りつくなり、その小さな茶色いものは悲痛な声で訴えました。

やさぐれ魚よりもずっと小さなその体は水の中とは思えないほどカリカリで、イカやタコ、ふぐのようにも見えます。

子どもの手からぼろりのにげだして、ここまで旅してきたおとっとたちでした。

「どうか少しだけかくまってください！」

と先頭にいた小さいかが、息を弾ませながらいいました。

「ブラックバスが追ってきます。私たちを食べようとしているのです」

見れば小さなおとっとたちは、全員息も絶え絶えのありさまです。

「こんな小さな子をいじめるなんて、ゆるせないな」

とたい焼きが一ヒレ前にでていいました。

「そっちの茂草の中に隠れているといいよ。ブラックバスなんか僕らが追い払ってあげるから」

たい焼きの申し出に、小さいかはありがとうございますと頭を下げ、仲間を急かして傍らの茂草のなかにかくれました。

おとっとたちの姿が隠れ切るかきらないかのうちに、テトラポット向こうからぬうっと黒い影が現れました。

たい焼きの数倍、美しいこいよりも1周りは大きく、2周りは太い体には、背中側は漆黒、腹側は金色の硬そうなうろこがギラギラ輝いています。

口を開ければたい焼きでもひと飲みでできそうなほど大きく、

その上にのった真っ黒のギョロギョロ目玉は、まるで闇にそまったビー玉でもはめこん

だように見えました。

「あんたら、今こっちに小さなおやつが来なかったか？」

3匹の前までやってきたブラックバスは、やさぐれ魚、たい焼き、美しいこいを順番にねめつけながら、尊大な態度でそう言いました。

「知らないな。あんたの見間違いじゃないのか？」

やさぐれ魚が答えると、魚はその大きな目玉をギョロリと動かし、はんっと口の端をつり上げました。

大きな口に割れ目ができ、3匹にはそこから奈落の底にでも通じていそうなのがはっきり見えました。

「なんだ？お前はクッキー、そっちのおっさんはたい焼きじゃねえか。近頃はおやつの川下りが流行ってるのか？」

「なんだと...？」

ぴくりと青筋を浮かべたやさぐれ魚をたい焼きが慌てて抑えます。

ブラックバスはそんな2匹をせせら笑いながら、今度は美しいこいにそのギョロギョロ目玉を向けました。

「そっちの別嬪さんは何だってこんなやつらと一緒にいるんだ？どうだ、俺と一緒にこないかい？」

「お断りします」

美しいこいはかんぱついれずに答えると、見るのも嫌だという風にヒレをシッシと動かしました。

「ははっ、嫌われちゃったか。」

けれどもふてぶてしいブラックバスは、まったく応えた様子もありません。

「まあたくさん来てくれた方が俺達は腹一杯になっていいけどな。おやつくんたち、食われたくなかったら下流にはこないほうが身のためだぜ」

はははと笑いながら、巨大なブラックバスはゆうゆうと泳ぎ去りました。

「なんだあのふざけた野郎は！」

プンスカ怒って今にも泳いでいって尻尾にかみ付きそうなやさぐれ魚を、美しいこいがなだめます。

「いけません小さな魚さん！せっかくどこかへ行ってくれたのに、自分から追いかけてどうするんです！たい焼きさんも見えないで止めてください！...たい焼きさん？」

美しいこいがいつもののんびり口調を期待してたい焼きの方を振り返ると、なんと、同じぐらいプンプンしているたい焼きがいました。

「なんだあの下品な野郎は！こいさんにいったいなんてこと言いやがるんだ！屋台のおっさんの方がよっぽど品がいいね！」

「たい焼きさんお気持ちはありがとうございます。けれど、ああいうやからは相手にしないに限りますから、どうぞお怒りを静めてください」

美しいこいが必死に2匹をなだめていると、小さなイカを先頭に茂草のなかからぞろぞろとおとっとたちが出てきて、3匹の前にきちんと整列しました。

その整った隊列を見て、やさぐれ魚もたい焼きも、ようやく静かになりました。

「危ないところをありがとうございました」

隊列のなかから小さなイカが一步前に進み出て、やさぐれ魚たちに深々と頭を下げました。

「ああ、そんなに硬くならないでよ。たまたま通りかかっただけなんだし」

たい焼きがあわててとりなします。すっかりもとのたい焼きに戻ったようです。

「何なんだあのブラックバスは。何であんたらは追われてたんだ？」

かたやいまだ不機嫌が抜けきらないやさぐれ魚が口を尖らせると、小さなイカは丁寧に答えました。

「私たちは陸でうまれたおとっとです。上流の橋の上であわや食べられそうになったものの、うまく子どものてから逃げ出すことができ、海を目指して下流へのたびをしています。ようやくここまで辿りつきましたが、ここから少し下ったところにブラックバス団のなわばりがありまして。通ろうとするとわたしたちを食べようと待ち構えているのです。何度もこっそりと通ろうとしたのですが、今回も失敗してしまいました。危うくまた仲間を失うところを助けていただき、どう感謝してもしたりません。」

それを聞いて美しいこいが口を開きました。

「失礼ながら、あの大きさのブラックバスとあなた方では泳ぐ速度も違いますし、まるで勝ち目がないように思われます。そんな危険な目にあってまで、どうして海を目指すのですか？」

こいの言葉に、小さなイカはきつと顔を上げました。

「小さなお菓子とはいえ、わたしたちも海の生き物の端くれです。川で満足するイカがありますか。ましてや子どもの手の中など。

仮初めでもイカと生まれた以上は、海に出られずにはおれないのです」

小さなイカはカリカリの体をむんとそらせました。後ろにずらりと並んだおととたちも、決意の表情を浮かべています。

「なんだか魚くんと同じことをいうなあ」

とたい焼きがいました。

やさぐれ魚は、自分よりまだ小さなイカを見つめました。

小さなイカもやさぐれ魚をじっと見つめます。

視線を合わせた2匹は深く頷きあい、ここに打倒ブラックバス・やさぐれ～おととと連合が結成されることとなりました。

すぐにバスのテリトリーの上流に位置する川底広場に「ぶらっくばす対策本部」がもうけられました。

ひるがえる「打倒ブラックバス」ののぼりを見て、川の生き物たちもなんだなんだと集まってきます。

最初はガヤガヤと遠巻きにしていた川の魚たちですが、一際大きなモクズガニが姿を見せると、ぴたりと静かになりました。

どうやら彼がこの浅瀬の長老のようです。

「これは何の騒ぎだ？」

とモクズガニは遠巻きにする魚たちを気にすることなく、やさぐれ魚に尋ねました。

「お騒がせしてすみません」

とやさぐれ魚は小さなイカの言動を思い出しつつ、できるだけ丁寧に答えました。

後ろでたい焼きが笑いをこらえています、あとでヒレでペチリとはたいておけばいいでしょう。

「われわれは事情があって海を目指すものたちです。

ブラックバスが邪魔をするので、なんとか奴らをやっつけられないかと作戦を練っておりました。

川の方々の生活を乱しはしませんので、しばらくこの場所を貸していただけませんか」丁寧にやさぐれ魚の物言いに、長老ガニは目をまたたかせました。

「ブラックバスをやっつけるとな？本気か？」

「本気ですとも」

やさぐれ魚が答えると長老ガニは強いまなざしでやさぐれ魚を見返しました。

「もしそんなことができるのなら願ってもない。あの乱暴ものたちには、われらも困っていたところなのだ」

長老ガニによると、どうやらブラックバスたちは人間の放流により、最近ここに住み着

いたようです。

体が大きいのを言いことに川を我が物顔に荒らしまわり、多くの魚たちに被害がでいるとのことでした。

「とは言え、彼らを正面から相手にするのは難しいでしょう」

と小さいイカが議長の美しいこいに向かって冷静な意見を述べました。

「相手は私たちの誰より大きい体をもっていますし数も多い。7～8匹はいたかと思います。」

「ああ、確かにそれぐらいはいるな」

と、長老ガニがうなずきました。

「あいつらが寝ている間にやっつけてしまうというのはどうだろう」とたい焼きが提案すると、

「私たちは寝ている間に、奴らのテリトリーを抜けようとしたことはあるのですが…」とふぐの形をしたおとととが控えめにヒレを挙げて言いました。

「必ず交代で眠って1匹は目を光らせているんです。あいつらめ。われわれを捕まえるのをゲームか何かだと思ってるんですよ」

小さなふぐは怒りを思い出したのか、ふるふると身を震わせました。

「見張りは1匹だけかい？」

とそれまで黙っていたやさぐれ魚がぴょいこらと議場に踊りでました。

「ええ、1匹だけです。けどやつはとても目ざとくて、おまけにわれわれの泳ぐ速さとは比べ物になりません。」

とふぐが答えると、やさぐれ魚はふむと考え込み、やつらのねぐらは分かってるのかいと聞きました。

「この季節は寒さがひどい。比較的暖かい川底の大岩の影がねぐらだろうな」

と長老カニが答えると、やさぐれ魚はニヤリと笑いました。

「それならやりようがありそう。ただこれには川のみなさんの協力が必要だが。一緒にブラックバスたちに一泡ふかせてやろうじゃないか」

たい焼きに美しいこい、おとととたちに長老ガニ、それに川のおもだった魚たちがやさぐれ魚の周りに集まり、ひそひそ話を始めました。

それが終わると、魚たちは必要なものをさがしにバラバラに泳いで行きました。

「彼らはすっかり眠りましたよ」

月明かりに銀のうろこをきらめかせながら、美しいこいが帰ってきました。

唯一ブラックバスと同じぐらいの大きさがあり、食べられる心配のないこいは、きけんな偵察役をかってでました。

昼間からブラックバスのアジトと思われる大岩のそばにひそんで、バスたちの動向を見張っていたのです。

「今宵の見張りは昼間に会ったあのバスのようです。見ている限り、どうやらあれがブラックバスたちのリーダーですね。」

「了解した。タイのだんなたちの方はどうだ？」

とやさぐれ魚が問えば、

「配置はすべて終わりました。ばっちりです。先ほどお伺いしたところ“いつでも来い！”と意気込んでおられました」

と小さなふぐが答えました。

「そうか、わかった！」

その報告を聞いたやさぐれ魚はびよいこらと広場の中央に躍り出ると、居並ぶ川の生き物たちを見渡しました。

すでに出発した部隊もあります。

そろっているのは昼間に集まった顔ぶれの半数ほどですが、誰の顔にも闘志がみなぎっています。

「では、総員配置についてくれ！作戦開始はあの月が真上に来た時。ブラックバスどもに一泡ふかせてやろうじゃないか！」

おー！

トキの声を上げると魚たちはそれぞれの持ち場に散っていきます。

「いよいよですね」

と小さなイカがやさぐれ魚の隣にやってきました。

「ああ」

とやさぐれ魚が答えます。

「作戦の要は俺たちだ。がんばろうぜ、隊長」

月が天の真ん中に差し掛かると、やさぐれ魚は出発しました。

背中には小さなイカをのせ、そろりそろりと泳いでいきます。

「そろそろやつらのテリトリーです」

と小さなイカがやさぐれ魚の背中で言いました。

「どこに潜んでいるかもしれません。十分に気をつけて... 危ない！」

小さなイカの忠告にやさぐれ魚が間一髪身をかわすと、先ほどまでやさぐれ魚がいた所

を大きな黒い影がすごい勢いで横切っていきました。

「は、残念外したか！」

やさぐれ魚と小さなイカが体制を立て直すと、

ぐるりと一周回ってこちらを見据えた巨大なブラックバスと目が合いました。

真っ黒だったはずの目は月明かりに爛々と輝く鬼のよう。暗い水の中で対峙した姿は昼間よりはるかに凶悪そうに見えます。

「せっかく忠告してやったのに、のこのこやって来るとは間抜けなお菓子どもめ。食っちゃうぞ！」

がパリとあけた口はまるでブラックホールもかくやと言わんばかりで、やさぐれ魚が何十匹も入りそうです。

しかしそんなことでひるむやさぐれ魚ではありません。

「はっ！やってみろ！」

と、やさぐれ魚はふふんと反り返って、居丈高に言い放ちました。

「小骨が刺さるぞ。お前なんかひとたまりもないね。」

「生意気なクッキーやろうが！」

猛然と突進してきたブラックバスの攻撃を尾びれをまたたかせてするりと交わし、やさぐれ魚はニヤリと笑いました。

「どうした？クッキーごとき楽勝じゃなかったのか？」

「おっとっともいますよ？あなたにはとるに足らない存在だと思いますが？」

小さなイカも一緒になって挑発すると、ブラックバスは完全に頭に血が上りました。

「この！」

やさぐれ魚はその小さな体を生かして、藻やゴミの間をひらりひらりと巧みにむきをかえながら、上流に向かって逃げだしました。

岩の手前での直角カーブやすりぬけ戦法を駆使して、追いつがるブラックバスを翻弄します。

むろん、挑発を挟むのも忘れません。

「ははっ！そんなに急いで泳ぐと、岩に頭をぶつけるぞ？」

「そのでかい図体も宝のもちぐされというやつですね！」

「このやろう！」

あやうくテトラポットに激突しそうになり、怒り狂ったブラックバスは尾びれで川底を蹴り上げました。

たちまち砂粒が巻き上がり、ただでさえ暗い水中の視界をうばいます。

「うわっ！？」

「やさぐれさん！」

バランスを崩したやさぐれ魚はたまらず、手近なテトラポットの間に逃げ込みました。

「それで隠れたつもりか！クッキー！」

ブラックバスが猛然と追いつがり、目の前のやさぐれ魚を小さいイカもろとも飲み込もうと隙間に飛び込んだその時、

「かかったな！」とやさぐれ魚と小さいイカが叫びました。

同時に、「今だ！」とたい焼きが叫び、砂に潜んでいた魚たちが飛び出します。その手や口には人間の釣り人が廃棄した網を咥えていました。

するりと網の隙間を抜けられるやさぐれ魚と違って、体の大きなブラックバスはひとたまりもありません。

たとえ自分の体ほどの魚でもなんなく食べられる自慢の口も、人間の作り出したビニールとやらには全く歯がたたないのです。

進むに進めず、引くに引けず、たちまち網にからめ取られてしまいました。

そこに小さな小さな隙間から脱出したやさぐれ魚と小さなイカがやっています。

「タイのだんな、みんな、おかげでうまくいったよ。」

とやさぐれ魚は言いました。

「2人とも迫真の演技だったよ。さて、あっちの首尾はどうだろう？」

とたい焼きがいつもののんびりした口調でいうと、小さなふぐが向こうから泳いでくるのが見えました。

「眠っている所を一網打尽作戦、大成功です！」

と小さなフグは息を切らせながら言いました。

「2カ所で7匹のブラックバスをからめ取りました！人間の網の力はすごいですね！」

「そいつは重畳！でっかい網を探し回った甲斐があったというものだ！」

とやさぐれ魚は言いました。

「バスたちの処遇は長老に任せよう。俺は早く海に行きたいんだ。」

からめとったブラックバスたちを引き渡した時、長老ガニの喜びようは相当のものでした。

ブラックバスの被害は、思ったより大きかったようです。

しかし彼らの処遇はやさぐれ魚たちの預かり知らぬことです。

やさぐれ魚とたい焼き、それに美しいこいとおととたちは、長老ガニが案内役につけてくれた手長エビを先頭に、川の魚たちに送られて川を下っていきました。

「もうすぐ下流ですよ」

と手長エビが一行を振り返りながらいいました。

「うひゃあ、ここは流れの速いところだねえ」

とたい焼きがのほほんと返します。

「ここは川や水路が合流するところですからね。ほら、あそこに水門もみえるでしょう。急に速くなる水流に気をつけてくださいね。」

手長エビの丁寧な先導で難所を越えた一行は、月が西に傾きだす頃には、どうやら川の出口にたどり着くことができました。

「ここが川の出口？海は...どこ？」

たい焼きが、いやたい焼きたちが呆然と立ち泳ぎを続けるのも無理はありません。

手長エビによれば、そこは確かに海へと続く川の出口。

けれど、一行の目の前には真っ黒な岩山が立ちはだかるばかりで、ただの寸止まりの袋小路しかみえません。

「一体何が起こったんだ？」

とやさぐれ魚が尋ねようとした時

「こんな岩、前はなかったぞ！」と手長エビが叫びました。

どうやら、これは手長エビにとっても、想定外の事態のようです。

そのとき、岩の一部がギョロリと動き、ぐるりと目玉が現れました。

自身と同じほどの大きさの目玉が、突然隣に出現したたい焼きはたまりません。

「お化けだ！」

と悲鳴をあげて逃げ出そうとする体に、「待てだんなさん！様子を変だ！」とやさぐれ魚が飛びつきました。

その声が聞こえているのかいないのか、

岩が「キュー」と魚たちの胸を打つか細い、しかし魚たちには十分な声量の声をあげると、遙か岩の向こうから空気を振るわせる切ない呼び声がこたえました。

「これはクジラですね。」

と、ジタバタするたい焼きとそれをなだめようとするやさぐれ魚をついと追い越し、黒

い岩肌に触れに来た美しいこいがいいました。

「クジラ？」

その聞きなれない単語をやさぐれ魚もたい焼きも、おっとっとたちも川の魚たちもそのまま口にのぼらせれば、

美しいこいはヒレでいとおしげに岩をなでながら話し始めました。

「クジラとは海にいる、大きい大きい神様のような生き物ですよ。

この子はまだ子どものようですが...陸に近づきすぎて打ち上げられてしまったのでしよう。

さきほどの声、たぶん沖にはお母さんがいらっしゃるんでしょうか？」

美しいこいの声が聞こえたように、子くじらはキューと鳴きました。

「そうだったのか...。子どもなんだね」

と、ようやくいつもの調子を取り戻したたい焼きがつぶやき、やさぐれ魚も噛み付いていた背びれを離しました。

「どうにか助けてやりたいけれど...」

と、たい焼きは岩にしか見えないクジラを見上げました。

子どもと言えどクジラです。

たい焼きに見えるのは真っ黒な壁ばかりで、山ほどある体をととても動かせるとは思いません。

「みんなで力を合わせても...無理かなあ...」

思わずたい焼きがつぶやくと

「無理だろうな」

と低い声がしました。

たい焼きが傍らをふりかえると、たい焼きに並んで、やさぐれ魚も子くじらを見上げていました。

「さかな君。でも見捨てるわけにはいかないよ。」

たい焼きが少し強い調子で言うと、

「当たり前だ、子どもだぞ。」

とやさぐれ魚も強い口調で返し、ふっと子くじらを優しい目で見つめました。

そしてショックを受けて黙り込んでいた手長エビにくるりと向き直ると、

「すまないがもう一度、できるだけ多くの魚たちの力を借りたい。あと、釣り人が落としていった糸がほしいんだが、どこかあるところを知らないか？」

と言いました。

手長エビもどうやらショックから立ち直ったようです。

「この川は釣り人には困らないからな。釣糸なんかお安いご用だ。それにブラックバスたちをやっつけてくれたあんたたちだ。喜んで力を貸すよ。」

と答え、早速川魚たちに話を付けにいてくれました。

「どうする気だい、魚君？」

たい焼きが不安そうに聞くと、

「まあ、なんとかなるだろうよ。」

とやさぐれ魚はくじらに視線を向けたまま答えました。

「途中に水門があっただろう？あれを開けるんだ。」

そろそろ月は西に沈み、東の空から太陽が顔を出すのではないかという時刻。一行は、つい数時間前に通過したばかりの水流の合流地点。水門の真下まで来ていました。

「本気かい？さかな君。」

「そんなことしたら、死んじゃいますよ！」

たい焼きと美しいこいが言い募りますが、やさぐれ魚は気にした風也没有せん。

「大丈夫、なんとかなるさ。」

やさぐれ魚は、釣糸のリールをしっかりとくわえ直しながら言いました。

「それより、頼んだぞみんな。」

とやさぐれ魚が言えは、

「任せてください、やさぐれさん。この小ささでは高が知れているかもしれませんが、全員全力を尽くしますよ」と小さなイカがびしっと敬礼しました。

もちろん、その背後には、おととたち全員が整列しています。

「まかしといてください。川の魚たちはみんな手伝うといってくれましたし、まあなんとかなるでしょうよ」

と手長エビも少々やけくそ気味に応じました。

「まあ、これ以外ないのかもしれないけど。よくこんなこと思いつくねえ…」

とたい焼きがあきれがちにいいました。

「では、行きますよ！小さな魚さん！」

覚悟をきめた美しいこいがその銀のうろこをきらめかせ、ざばんと川にもぐりました。

「よろしく頼む！」

やさぐれ魚は真っ直ぐに空をあおぎ、はるか頭上にある水門のハンドルに顔を向けて、来たるべき衝撃にそなえます。

「それっ！」

水中深くから浮き上がる力を利用して、美しいこいが渾身の力で弾いたやさぐれ魚は、リールの尾を引きながら宙を舞い一直線に水門の上へ。

ペチリと音を立てて、ハンドルの脇に落ちました。

「いててて…。さすがきれいなこいさん。コントロールは抜群だな」

起き上がったやさぐれ魚は、ぴょいこらぴょいこらと水門のハンドルに近づくと、何度も何度もジャンプして、くわえたリールをくるくるとハンドルに巻きつけます。

最後には器用にもぴょんぴょんぴょんと八艘跳びならぬ8の字跳びをして、どうやらリールをしっかりとハンドルに結び付けました。

「こんなもんかな」

やさぐれ魚は1人ごちると、下の川に向かって呼びかけました。

「準備OKだ！」

やさぐれ魚がどなると、たい焼きが川のなかに整列した魚たちに向き直りました。

「よし、合図がきたぞ。ではみんな、準備はいいかい？」

「おー！」

魚たちが一斉に答えます。

その口々にはリボンをしっかりとかくわえ、リボンの先はやさぐれ魚が咥えていったリールの端に結び付けられています。

「では！」

と、たい焼きは一段高い岩場にのぼると、芝居がかった声で言いました。

「みなさん、我ら川の一同、心をそろえ〜！」

魚たちがリボンにくわえる口にも、ぐっと力がこもります。

「引けや〜それっ！」

野太いたい焼きの声につられて、

魚もカニもエビもおとっとも、リボンを引くみんなの力が1つになりました。

「そおーれっ！そおーれっ！そおーれっ！」

少しずつ、少しずつ動くハンドルに、やさぐれ魚がいる堤防の下からゴゴゴという音が聞こえてきました。

結び目が解けないように必死に咥えていたやさぐれ魚はようやくその口を離し、声を限りに叫びました。

「開くぞー！！！！全員にげろー！！」

やさぐれ魚の声を聞くや、わらわらと魚たちが逃げ出します。

やさぐれ魚もぴょいこらとジャンプしてポトリと川におち、必死に岩場の影を目指して泳ぎました。

「さかな君！早く！」

「小さい魚さん！」

「やさぐれさん！」

ひどい水流にひるまずに川中で待っていた3匹が、早く早くとやさぐれ魚をせきたてます。

「なにやってんだ！あんたらも速く…」

「逃げろ」と言いたかったやさぐれ魚は、最後まで続けることはできませんでした。コンクリートの壁からあふれ出した鉄砲水は、やさぐれ魚もたい焼きも美しいこいも小さなイカも、おとととたちも子くじらも、みんなみんな飲み込んで、一直線に下流へと押し流してしまいました。

◇

◇

◇

右も左も上も下も分からない渦にもみくちゃんにされたやさぐれ魚を、ふわりと何かが包みあげました。

「？」

やさぐれ魚が目を開くと、辺りにはたい焼きや美しいこい、おとととたちがふわふわと浮いています。

どうやらみんな無事ようです。

「息子を助けてくれてありがとう！」

空気を震わすような大音響に驚いて下を見てみれば、キラキラ光る戦艦のような漆黒の巨体が見えました。

ふと横に目を転じれば、子くじらがお母さんに寄り添うようにきもちよさそうに泳いでいます。

「なにたいしたことじゃない！それより元気そうで何よりだ！」

とやさぐれ魚はありったけの声を集めて腹のそこから叫んで返事をしました。

「何かお礼がしたいのだけど！あなたたち、ほしいものはない？」

相変わらず空気を震わせる大音量で、クジラのお母さんが尋ねました。

「じゃあ海につれていってくれないか？ここはどこだい？」

やさぐれ魚が叫び返すと、クジラのお母さんはまるで世界が震えているような、笑い声をあげました。

その振動に併せてふわふわ浮いたやさぐれ魚たちも上下します。

「海ですって？あなたのいる、ここが海よ。」

「なんだって！？」

やさぐれ魚が驚くと、クジラのお母さんはさもおかしそうに笑い、やさぐれ魚はますます大きく揺さぶられました。

「しっかりその目でみるといいわ。そら！！」

クジラのお母さんの潮にのって、高く高く吹き上げられたやさぐれ魚は、生まれて初めて、おもわず歓声をあげました。

やさぐれ魚の目の前には、青い青い海が、水平線から上る朝日に照されてきらきらと輝きながら、どこまでもどこまでも広がっていました。

To Be Continued"Yasagurezakana no Boken3"-“ Yasagurezakana to Ryugunotakara”

ふんわりとした設定

やさぐれスペック



- ・ 体長4cm
- ・ 体高2.5cmぐらい
- ・ 厚さ5mmぐらいか？
- ・ 最大瞬間海中速度はたぶん世界最速のマグロ並（約110km）
- ・ 通常遊泳速度は20～30kmぐらいじゃないかと
- ・ 頭の回転：よいはず
- ・ バターたっぷりのこんがりボディ。水の浸透はもちろん、コンクリにぶつかったぐらいじゃ砕けない。意外とタフ。
- ・ 天敵はアリ。また陸地ではペチペチ跳ねるしかできない